

質的研究法・混合研究法における疑問点 —質的研究セミナーを終えて グループワークの記録—

松下 宗洋^{*1,*2}・青柳 健隆^{*1,*3}・戸ヶ里泰典^{*4}

目的：2014年1月26日に日本健康教育学会主催で質的研究セミナーが開催された。そこで、セミナー参加者によるグループディスカッションの成果ならびに総合討論の概要を報告する。

方法：受講者総数は101名であった。グループワークでは、計10グループに分かれ「質的研究について知りたいこと」をテーマに議論し模造紙に整理した。また、整理した結果をもとにグループごとに講師並びに編集委員に対して質疑応答を行った。本稿では各グループの整理結果について再度構成、整理を行なうとともに、質疑の概要を記述した。

結果：質的研究に関する疑問点として大きく6つ「1. 質的研究法・混合研究法の概要」「2. 研究戦略・方略について」「3. データ収集の方法」「4. 分析の方法」「5. 分析から結果への移行」「6. 論文執筆について」のカテゴリに分けられた。総合討論においては、質的研究方法論の習得、分析のテクニック、質的研究の質と原著性、飽和状態に達すること、等について質疑が行われた。

結論：グループワークの結果から、疑問内容はきわめて多岐にわたっていることが明らかになった。総合討論においても、本質的で具体的な問題についてのやり取りが展開されて、参加者は有益な情報を得ることができた。

〔日健教誌，2014；22(2)：185-191〕

キーワード：質的研究，研究方法論，混合研究，グループワーク

I はじめに

医療社会学や医療人類学といった領域では健康問題を抱える当事者や医療従事者に焦点を当てた研究の方法論として、質的研究が古くから実施されてきている。しかし、1990年代以降になると、保健・医療・福祉等の実践的な学問領域において、多くの質的研究が実施されるようになってきた¹⁾。本誌においても同様であるが、学術誌に投稿・公表される質的研究は増加しており、玉石混交で

あって、近年はそのクオリティを見極めることが必要になってきている²⁾。

こうしたことから2014年1月26日に日本健康教育学会主催本誌編集委員会企画で「質的研究セミナー」（以下、本セミナー）が実施された。本セミナーは質的研究の専門家である大谷順子先生（大阪大学）による講演会と、その講演会を受けて参加者同士のグループディスカッションと講師および本誌編集委員との質疑による2部構成で実施された。

本稿では、第2部で行われたセミナー参加者によるグループディスカッションの成果、ならびに総合討論の概要を報告する。

II 「質的研究セミナー」の概要

本セミナーの概要を表1に示した。受講者総数は101名（正会員49名，非会員22名，学生会員15

*1 早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

*2 独立行政法人国立健康・栄養研究所健康増進研究部

*3 日本学術振興会

*4 放送大学教養学部

連絡先：戸ヶ里泰典

住所：〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11

放送大学教養学部生活と福祉コース

E-mail：ttogari@ouj.ac.jp

表1 セミナー概要

タイトル	日本健康教育学会主催 質的研究セミナー 質的アプローチを用いた研究手法 ―健康教育分野への適用―	
日時・会場	2014年1月26日(日) 13:00~16:00 女子栄養大学駒込キャンパス小講堂	
プログラム	開催の挨拶	衛藤 隆 (日本健康教育学会理事長)
	第1部	講義 「質的アプローチを用いた研究手法-健康教育分野への適用」
		講師 大谷 順子 (大阪大学)
		司会 神馬 征峰 (本誌編集委員長)
	第2部	グループワーク
総合討論		
総合司会	朝倉 隆司 (本誌副編集委員長)	
セミナー参加者数	101名 (正会員49名, 非会員22名, 学生会員15名, 学生15名)	



写真1 参加者の様子



写真2 グループワークの様子

名, 学生非会員15名)であり, 学会員・学生会員のほか学会会員以外の参加者も多く見られた(写真1~2参照).

グループワークでは, 1グループあたり5名~6名程度の小グループで, 計10グループに分かれ「質的研究について知りたいこと」をテーマにディスカッションが行われた. グループワークの時間は40分間で, 各グループに配属された編集委員および, 編集委員が指名した参加者がファシリテーターを務めた. ディスカッションの際には, 模造紙やポストイットを利用し質問・意見の整理が行われた. 各グループが質問・意見の整理のために作成した模造紙は, セミナー終了後に記録係が回収し, 質問・意見の集計を行った.

グループワーク終了後に総合討論が行われた. ここでは, 各班ごとにグループワークにより整理した質問を行い, 講師(大谷順子氏)および編集委員長(神馬征峰氏)から返答を行う形式で実施した.

本稿では, まずグループワークにおいて議論された質的研究実施上の問題について整理を行う. 特に問題点・疑問点については, 多岐にわたるうえ, 重複もかなり見られていたことから, 整理のうえ, 代表的な疑問点について整理・列挙する形で示すこととする. 次に質疑応答の内容について, 本セミナー内容に沿った重要なやり取りを中心に抜粋して示す.

Ⅲ 結 果

1. グループディスカッション

表2にグループワークで議論された質的研究に対する質問・意見の主な内容を示した。大きく6つのカテゴリに分かれた。「1. 質的研究法・混合研究法の概要」では、〈質的研究とはなにか〉、〈混合研究法とはなにか〉の2つに分類された。「2. 研究戦略・方略について」では、〈質的研究

の研究計画の立て方〉、〈研究チームの組織の方法〉の2つに分類された。「3. データ収集の方法」として、〈サンプリング方法〉、〈インタビュー方法〉、〈データ作成の技術〉の3サブカテゴリに分類された。

「4. 分析の方法」では、〈分析方法の概要〉、〈分析の技術〉、〈コーディング〉、〈非言語データの扱い〉、〈分析ソフトの使用について〉、〈コード化・コード名〉の計6サブカテゴリに分

表2 グループワークで整理された主な質問事項

質 問 ・ 意 見 内 容
1. 質的研究法・混合研究法の概要
〈質的研究とはなにか〉
質的研究にはどのようなメリットがあるのか
質的研究は原著論文になるのか
質的研究の論文作成のためのガイドラインはあるのか
〈混合研究法とはなにか〉
量的と質的の混合研究とは具体的にどのようなことか、集団を代表する必要のない質的研究と量的研究はどうつながるのか
量的研究の対象者より選択してインタビューをするという場合の混合研究法における調査の進め方や注意点はどのようなものか
混合研究法を実施した際に質的研究と量的研究で結果が異なる場合はあるのか。また、そのような先行研究の例があれば知りたい
2. 研究戦略・方略について
〈質的研究の研究計画の立て方〉
質的研究の場合先行研究のレビューはどのようになされていくのか
質的研究では基本的には仮説は設定しないものなのか
計画の段階で目的から結果に至るまでの程度あらかじめ構想をしているのか
〈研究チームの組織の方法〉
スーパーバイザーを探すことができなかった場合、研究の信頼性はどのように確保できるのか
良い質的研究の研究チームである条件としてはどのようなものがあるか
3. データ収集の方法
〈サンプリング方法〉
質的研究の分析を行う上での適切な人数・選び方はあるのか
サンプルサイズが小さい研究で一般化できるのか。あるいは質的研究では一般化は求められないのか
自由記述の回答など既存データを使った場合、サンプリングなどの問題はどうか・どこまで問うのか
〈インタビュー方法〉
インタビュー時の具体的な技術について、例えば誘導しない、直接的、回答をひきだすための技術にはどのようなものがあるのか
フォーカスグループインタビューの記録を取るときに注意することは何か
〈データ作成の技術〉
インタビュー調査、フォーカスグループなどではすべての発言を文章化する必要があるか
写真などもデータになるということだったが、たとえば本人の体験談によって表出された絵の変化のようなものもデータとして扱えるのか
フィールドノーツはどのようにデータとして取り扱うのか

表2 グループワークで整理された主な質問事項（続き）

質 問 ・ 意 見 内 容
<p>4. 分析の方法</p> <p><分析方法の概要></p> <p>分析方法にはどのような種類があり、それにはどのような特徴があり、どのような過程を経るものなのか データを具体的にどう分析すればよいのか、もう少しわかりやすく教えてほしい</p> <p><分析の技術></p> <p>理論的飽和状態を証明し確認するためにはどんな作業および注意事項があるのか データ自体は少ないが重要と思われる情報を抽出するにはどうすればよいのか 分析者によって気づける人と気づけない人の差を埋めるためにはどうすれば良いのか</p> <p><コーディング></p> <p>インタビューデータで、1文に複数の意味が含まれる場合は、複数のコードを付加しても良いのか コード化の際「研究者で意見が一致するまで話合う」時に、標準的に必要な研究者の人数はどのくらいか</p> <p><コード化・コード名></p> <p>コード名は名詞のみか、動詞も含むものなのか コード化とカテゴリ分類の繰り返しは、どこまでするのか</p> <p><非言語データの扱い></p> <p>画像データはどのように質的分析をしていけば良いのか 発言以外のその場の空気や表情などは、どのようにデータ化し分析すればよいのか</p> <p><分析ソフトの使用について></p> <p>個人で手に入るソフトで研究的に定評のあるソフトは何か Nvivoの英語版ソフトを用いて日本語データの分析は可能なのか</p>
<p>5. 分析から結果への移行</p> <p><ストーリーの構成方法></p> <p>FreeNodeが生じた場合には、どう扱うのか。さらにそれを探るためにサンプリングをすすめていくのか 男女別に異なる分析結果が生じた際には扱いはどうするのか</p> <p><概念と理論構築></p> <p>新しい理論を作る時、1人よがりにならないための注意点には何があるか 質的研究により構築した理論・モデルを活用して、その理論・モデルの正当性を評価することは必要か</p>
<p>6. 論文執筆について</p> <p><論文の具体的な書き方></p> <p>質的研究について論文を書く時に、研究デザインについて何を記載するか 分析のセクションで、記載する必須事項にはどのようなものがあるのか 論文における「結果」のセクションの構成はどうあれば良いか 論文中にデータを具体的にどのように示すと良いのか 質的研究における考察内容の水準を保つためにはどのようにすればよいのか、研究グループでの議論では 限界があるのではないか</p>

かれた。「5. 分析から結果への移行」では、<ストーリーの構成方法>、<概念と理論構築>の2サブカテゴリに分類された。最後に「6. 論文執筆について」で、「論文中にデータを具体的にどのように示すと良いのか」などの<論文の具体的な書き方>というサブカテゴリに集約された。

2. 総合討論

1) 質的研究方法論の習得について

質的研究の方法論的習得の方法としてどのようなものがあるのか、という問いに対し、大谷氏は、オーストラリアで開催されたリン・リチャーズ氏による質的研究のワークショップに参加した経験について紹介した。「そのワークショップでは、参

加者が各々のデータを持参するものであった。自分が集めたものをデータと呼べるのか自信さえなかったが、主催者が自分のデータを一番面白いと感じてくれ、自分のデータの一部を参加者全員で分析することなどを通じて、非常に良い刺激になった」と述べていた。

2) コーディング・分析のテクニック

データをコード化するにあたり気を付けること、に関する質問があった。これに対して、大谷氏は、「何を聞きたいかによる。その発言者ごとに大きく括った、大きなコーディングをする。それから小さく、テーマごと、ポジティブ・ネガティブにでてきた面白い言葉、大きなセンテンス全部、パラグラフ全部ではなくて、小さな言葉でコーディングする。あとでサーチをかけたときに、どういう風にてきてほしい、でてくると面白く見ていけるか考えていきながらコーディングをしていく。人によって特徴、癖もあるので、同じコーディングにはならないし、同じデータの中からなにを見ているかで違う」と回答した。

次に、「コーディング実施では人によって癖があるとおっしゃっていたが、癖を出さないようにするにはどうすればよいのか」という問いがあった。これに対して大谷氏は、「癖のあるコーディングは間違いがあるという意味ではない。質的研究の場合にはコーディングしたものから、元のテキストに戻ることができる。見ている間には常に戻らないといけない、常に行ったり来たりしている。(中略)癖のあると言った一つの理由は、人によって光る、目を引く場所が違う。それはその人が、そのデータを使ってどういうストーリー・理論を組み立てていくかにつながっていく。そのため、どれも間違いではない」と回答した。

また、研究グループ内で意見が分かれた場合はどうすればよいか、という質問に対して大谷氏は、「データに戻って(議論を)するので、意見がずれるというよりも、その議論を組み立てたことをバックアップするデータを示せるか示せないか(が議論の中心となる)。相反することを言うには、

相反するデータがどこかにあるかから示せる」と回答した。また、神馬氏は、「1人だけで進めるのはとてもリスクがある。そのため、経験のある人のチェックを受けながらスーパーバイザーと研究する人が一緒に作品を作り上げる。そういうことも方法に書かないと、その研究の信ぴょう性を問われることになる」と回答した。

さらに、一つの文章からコードをとる場合に一文から1つとする研究者と、複数とする研究者がいるが、どちらか、という質問があった。これに対して大谷氏は、「重なっているくらいのほうが(良い結果を)導きだせる。(中略)重なっていないところがあるのもいいが、重なっているほうが面白い発見につながっていく」と回答した。

3) 質的研究の質と原著性

質的研究全体を通して、研究の質をどのように担保しているのか、量的研究で求められるように質的研究で再現性は担保されるのか、という問いがあった。これに対して大谷氏は、「質的研究では元のデータに戻れるという点で客観性がある。質的研究は主観的というのは間違った批判である。」「元から再現性を質的研究では求めている。質的研究は実験室で全部の条件をそろえて行うということではなく、リアルワールドの中で明らかになること(を追究する方法)であるため、再現性は求めている」と述べた。

次に、原著になる論文か、実践研究の枠になってしまう論文かの違いはどこにあるのか、という質問があった。これに対して大谷氏は、「(原著)論文になるかどうかは、分析が入っていくか、ただケースだけで終わっているのか。研究者の分析が入っていつているのかというところで、同じ題材でもどう書き上げていくかで異なった枠の論文になっていくケースが多いと思う」と回答した。さらに質的研究実施に関するガイドラインはあるのか、という質問に対し、神馬氏は、「PLOS ONEのサイトでは、チェックリストがある。BMJにもある。(中略)本誌では、実践研究も原著並みに価値がある論文であるということを目指して学会誌

を作っている。だから実践だけではダメということはない。ただやはり、原著の方が理論的なサンプル抽出や、これ以上新しいアイデアは出ないというところまできちんとやっていけばよい。それに対して原著になりえないものは、それなりに理論化が弱いというところに差がある」と述べた。

なお PLOS ONE の執筆要項において、質的研究に関する執筆ガイドラインとして以下の記載がされている。「Qualitative research studies should be reported in accordance to the Consolidated criteria for reporting qualitative research (COREQ) checklist. Further reporting guidelines can be found in the Equator Network's Guidelines for reporting qualitative research」³⁾

4) 飽和状態に達するという事

飽和状態に達することはどのように証明や確認するのか、という質問があった。これに対して大谷氏は、「飽和状態に達したと『わかる』ということには確かに大事なところ。コーディングをやっていたら楽しくなるので、コーディングトラップ、飽和状態に達しているのに、まだまだそこに労力を使って延々とやってしまっ、その先に進まないという状況に陥ることは1つのトラップとして問題である。いくらやっても次に新しいことはもう出てこない状態が飽和状態である。そこに達したとわかって、仕上げる方向に移っていかないといけない。論文にまとめるという作業が苦しい。分析や研究をはじめの初期は楽しいが、最後まとめる段階で大変に苦しむ。そこを見極めて進まないといけない」と回答した。

5) 混合研究について

「たとえば選択式の調査票のあとで自由記述があるという形の調査がある。(中略)その場合、それは最初から(混合研究の)方法として計画されているものならば(調査研究として設定)してよいのかどうか」という質問があった。これに対して大谷氏は、「量的なアンケート調査のなかに、選択的な質問のほかに自由記述回答式のものが入っている場合、混合研究方法のなかの埋め込みタイプ

のデザインの1つになる⁴⁾。それはもちろんしてよい。」と回答した。

IV おわりに

本セミナーでは、100名を超える参加があり、質的研究への関心の高さがうかがえた。また疑問内容については、グループワークの結果からきわめて多岐にわたっていることが明らかになった。総合討論においても、本質的で具体的な問題についてのやり取りが展開されて、参加者は有益な情報を得ることができたように見受けられた。

しかしながら、時間の制約もあり、様々な疑問点については質疑応答では十分には明確にならなかった点も多くあるように見受けられた。今後は、こうした疑問を踏まえて、質的研究の実施に資する何らかの取り組みが必要になると思われる。また、議論の中で触れられていたが、本誌における質的研究論文を投稿する際のガイドラインの作成も近い将来必要になってくるであろう。

本原稿は、本セミナーを企画した編集委員会が決めた記録係が当日の記録を整理し、まとめた原稿である。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

文 献

- 1) 木下康仁. ヘルスリサーチにおける質的研究. 井上洋士編. ヘルスリサーチの方法論. 東京:放送大学教育振興会;2013. 89-104.
- 2) 佐藤郁哉. 質的データ分析法 原理・方法・実践. 東京:新曜社;2008. 3-15.
- 3) PLOS. PLOS ONE Manuscript Guidelines. <http://www.plosone.org/static/guidelines.action> (2014年4月9日にアクセス).
- 4) クレスウェル JW, プラノ クラーク VL. 大谷順子訳. 人間科学のための混合研究法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン. 京都:北大路書房;2010. 74-79.

(受付 2014.3.25.;受理 2014.4.14.)

Basically questions on qualitative and mixed research methodology: a report of group works in “qualitative research seminar”

Munehiro MATSUSHITA^{*1,*2}, Kenryu AOYAGI^{*1,*3}, Taisuke TOGARI^{*4}

Abstract

Background: The Japanese Society of Health Education and Promotion (JSHEP) conducted a seminar on qualitative research on January 16, 2014. This paper reports on the seminar outputs of group work and discussions with instructors.

Contents: In total, 101 participants attended the seminar. They were divided into 10 groups, each of which discussed the following question: “What do you want to know about qualitative research?” This initial question generated further questions and comments within the groups that were all recorded. After engaging in an intra-group discussion, each group addressed their collective questions to the instructors. We compiled and organized the results of the group work, which we present in this paper with a summary of the subsequent discussion held with instructors. We thematically arranged questions raised by participants into the following six categories: (1) an explanatory overview of qualitative research and mixed methods research, (2) research strategies, (3) data collection, (4) data analysis, (5) progression of analysis to obtain results, and (6) writing a paper. During the discussion with the instructors, a representative from each group raised questions. These included, for example, development of qualitative research methodologies, coding techniques and analysis, probability of acceptance of original papers, the quality of qualitative studies, and reaching a saturation point. It was evident from the group work that the participants raised a wide variety of questions.

Conclusions: By discussing specific and focused key questions relating to qualitative methodologies with instructors, participants could acquire beneficial inputs.

[JJHEP, 2014 ; 22(2) : 185-191]

Key words: Qualitative study, research methodology, mixed methods research, group work

*1 Graduate School of Sports Sciences, Waseda University

*2 Department of Health Promotion and Exercise, National Institute of Health and Nutrition

*3 Japan Society for the Promotion of Science

*4 The Open University of Japan